

気持ちを新たにして私自身の問題に取り組みたいと思っている。

(3 回生)

このごろ思うこと

林 道子

私は S 3 5 年に卒業して、当時の都庁民生局に就職しました。そう深い考えもなく福祉の仕事をしたいと希望したら、下町のある福祉事務所に配属されました。大卒者はまずケースワーカーにするという局の方針で、私も早速その仕事につかされたのです。この区は山手地区と異なり、大変特殊な地域を多く抱えていました。パタヤ、ドヤ、朝鮮人部落等、私が今までに見たこともないような人々の生活がそこにありました。仕事がかついでにあって他所からの転勤希望者は皆無でしたから、欠員はいつも新卒者でうめられ、そのことがかえって職場を若々しい活気あるものにしていました。“どうやって生きていけというんだ！”ともろにぶつかってくる対象者への対応に明け暮れた緊張の日々。さすがにノンビリ屋の私も、今までの自分が内面からつき動かされるような衝撃を受けたのでした。そして、人々の悲惨とつきあうという余り愉快でない仕事をいつのまにか十年以上も続けてしまいました。(昨年、人事異動で児童館と敬老館の仕事にかわるまで。)

又、この間、私は子どもが三人になりましたが、仕事を続けるためには保育(教育も含めて)の問題を解決することが絶対の条件でした。明日から子どもを預かってくれる人をポスターで探すような時代でしたから並大抵ではありません。その頃団地に住む同じような状況の人達(ご主人も)と、子どもの手を引いて陳情に出かけたりしたものです。仕事か家庭か、いつも二者択一をせまられた体験の共有者達は、今でも年に一回集まって、あの頃の話と今日的话题(受験のこと等)に時間を忘れて語りあうのです。でも、今考えてみると仕事と子育て両方をとるとするのは大変欲張りな生き方を選んだものだと、われながらあきれられる思いがします。そして、くらしに根つきつゝ仕事にたずさわることの意義について、いさゝかの自負心もちょっぴり……。

現在では、婦人が働き続けるための条件も大分整えられてきましたが、先頃総理府が発表した「婦人白書」にもみられる通り、まだ解決されるべき諸問題は実に多いです。特に社会的施策以前の問題として、昔からの根強い因習があげられます。

一例として、職業への関わり方についてですが、男性は幼時から自立して働くように育てられており、社会に出れば男性の仲間から引き立てられ、鍛えられて見違えるように成長していきます。もちろん今日の競争社会ではきれいごとばかりではないし、「競争原理に立つオトコ文明のゆきづまり…」という指摘も一面ではうなずけるのですが、いずれにしても、人間は環境や条件によって成長もし変化もするので、学びたい、向上したいという人には、いつもどこでも学習と研鑽の場を開いてほしいと願うのは私だけではないでしょう。

かつて苦難の道を切り開いていった日本の女性達の歴史をひもとく時、私の中に深い感動が広がっていきます。子育てとくらしに密着した地を這うような女達の生き方。それは能率や競争とは次元の異なる、生命につらなるものなのでしょう。さいごに先日の朝日新聞にのっていた早大鹿野教授の一

文より引用させていただいて拙文を終らせていただきます。「1970年代に入ってから世界的ともいえる女性問題の提起は、女性史学の進展にあたたかな活力をあたえた。(中略)それが歴史の見方について、ひいては世の中全体に何らかの転換をせまる起爆力を内包している。」(8回生)

青春の庭

太田晴子

私は、現在百科事典関係の出版社に勤めている関係で、母校を訪れる機会が割合に多いといえるかもしれませんが。なかでも地理談話会は私自身の勉強のためと、先生方をはじめ先輩や後輩の交歓の場となることを望んで、いつも心待ちにしております。しかしながら実際は、時間に追われて会が終るとそそくさと家路に急ぐのが常でした。それにいつもは私たちの学生時代にはなかった文教育学部本館の方から出入りし、その7階から広くなった母校を眺めるだけで、往時とひき比べある種の感慨こそかすかに胸の中へ湧き上ることはあっても、遠い学生時代の一こま一こまを思い出すということはありませんでした。

1月も半ばをすぎたある土曜日、式先生の話を楽しみに談話会に出かけました。ところが折悪しく亭主の都合がつかず、4才の次女を連れて出かける破目となりました。足手まといの娘を叱咤しながら都電通りの門から入りました。昔と少しも変わらない門と裸の銀杏並木、窓わくの少し大きくなった本館など古色蒼然としたたたずまいがふと私の足を止めました。「ここはママの学校よ」と子供に言い聞かせつつ私にとってまさに「青春の庭」である芝生のキャンパスへと急ぎました。中学校に通じる道との曲がり角の掲示板には、「海外研修旅行」や演奏会のポスターが目につきました。そのポスターとポスターの間をよぐればがした跡から、60年安保の頃の集会ビラや原書講読会のビラが浮び上って来ました。そしてくすんだ掲示板からは未知に対する恐れと青春の迫力のようなものが感じられてくるのです。

理学部の建物の前にもう一棟同じような建物が建築中でした。かつて「山の上」と呼んでいた所には学生会館があり、かつてはモダンな建物であった学内寮はうす汚れ哀れをもよおしました。でも護国寺の杜の眺めは少しも変わりません。遠くに白い超高層ビルが一つ見えるのを除けばあの頃の風景です。芝生に坐っておしゃべりをした頃のざわめきや頬をなでる心地良い風の感触、護国寺の森が暮れなずんだ頃そのまわりを埋める街の灯がすぎ去った長い時間を消していくのでした。

高い煙突のついたコンクリートの建物… かつては食堂であったのが今はクラブハウスになっているようです。このカレーライスは黄色いえのぐのようで、お醤油をかけて何とか口に入れたものでした。

横の学生会館の芝生でラケットを振っている学生達、本館の前でみかけたランニングをしている生徒達、皆榮養満点のはちきれんばかりの身体つきをしています。その若さにはこちらを困惑させるような眩しさがあります。

図書館 … これは確か私が卒業するころ学生会館と一緒に出来ていたのでしょうか。今は出入口